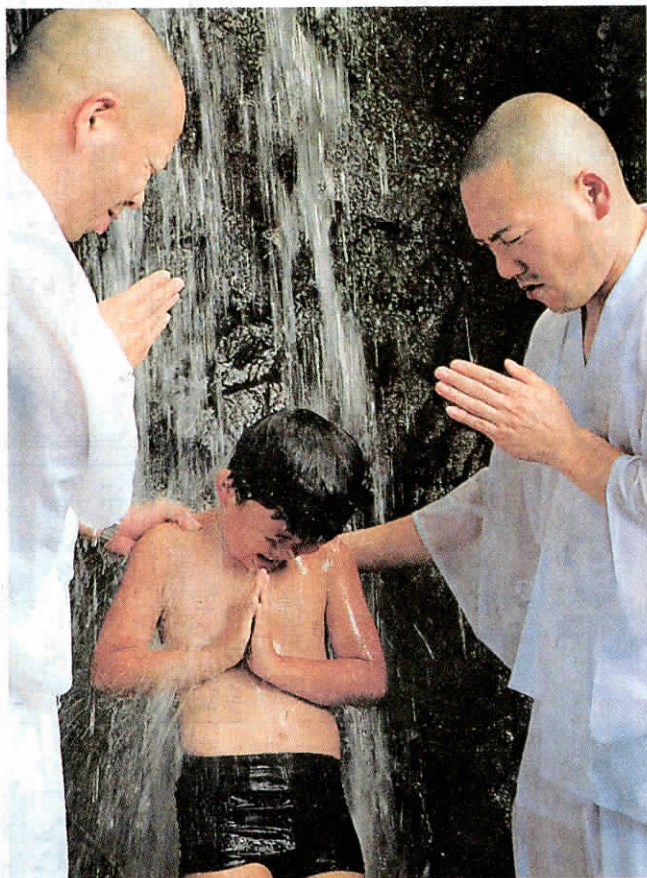


ヒーリングタウン ささぐり

おへんろ道編

となった今年、灌行のほか、東日本大震災被災地へ送る千羽鶴作りや、夜は花火などがあつた。催したのは、篠栗八十八カ所霊場の20、40代の僧侶ら9人で行く「法青会」。牟田さんは現会長で、39番札所・延命寺の跡取りだ。

法青会は四平世紀ほどの1988年、若手僧の集う場として発足した。初代会長は牟田さんの義父で同寺の住職、牟田雅観さん(64)。当時、雅観さんは高



灌行する子どもの横に立ち、「南無大師遍照金剛」と唱える牟田良康さん(右)

PRにも励む若手僧

野山での修行をへて寺に戻り、僧として歩みだしたころだった。以前は、水資源開発公団(現・水資源機構)で働き、ダム設計などに当たっていた。長男の雅観さんは父親が倒れたのを機に、「親も寺も捨てられん」と、同公団を退職した。

寺へ帰ってきた自分に課したのは月1回のへんろ。すぐに、へんろ道の雑草の多さに気付いた。数多くのおへんろさんたちが踏み固めてきた道の荒廃。車社会

法青会

の到来で、マイクロバスでの参拝が普通になっていった。1990年代に入ると、他のおへんろさんと出会う回数が増えたり減ったり。時代は「昭和」から「平成」に移っていた。「地域の連帯が薄れ、仏様に手を合わせるほどの心配事もないのだろう」。雅観さんは考え

の到来で、マイクロバスでの参拝が普通になっていった。現在、へんろ道の手入れとともに、霊場のPRは法

を知ってもらおう機会づくりを努める。会長の牟田さん(左)は義父の月1回のへんろを

引き継ぎ、一般参加者を伴って歩いている。既に約40巡した。妻の実家が延命寺だったという縁で、会社員を辞めて仏門に入った牟田さん。霊場の未来、祈ることの未来を、歩きながら考えるつもりだ。義父の雅観さんは見守ろうと思っている。将来の霊場を担う自覚を持って、頑張っしてほしい」と願いながら。



街ひと物語

篠栗四国八十八カ所霊場

江戸時代末期の1835年、本四国八十八カ所の巡拝を終え、篠栗に立ち寄った尼僧慈忍が、弘法大師(空海)ゆかりの地と伝えられる篠栗に、八十八カ所霊場の創設を発願したことが始まりとされる。慈忍の死後、藤木藤助が88の仏像を各所に安置して祭った。1899(明治32)年、高野山(和歌山県)にあった南蔵院を霊場の総本寺として迎え、大正、昭和にかけ参拝者が増加。小豆島(香川県)、知多(愛知県)と並び、日本三大新四国霊場と称される。篠栗八十八カ所は、約4分の1が任職が管理する寺院で、他は地元の守堂者が管理する札所。

7月末、篠栗町・山手地区の三角寺を拠点に、小学生が1泊2日の日程で参加した「寺子屋」。20回目

法青会

の到来で、マイクロバスでの参拝が普通になっていった。現在、へんろ道の手入れとともに、霊場のPRは法

を知ってもらおう機会づくりを努める。会長の牟田さん(左)は義父の月1回のへんろを